

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～30頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が真途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

レッドサンブラッククロス1
合衆国侵攻作戦

プロローグ

7

1 戦争計画…一九四七年

23

2 大ドイツ北米総軍…一九四八年

85

3 最初の半日

147

レッドサンブラッククロス2
迫撃の鉄十字

171

4 合衆国崩壊

173

5 第二戦線…一九四八年初夏

291

レッドサンブラッククロス3
反撃の旭日旗

6 戦艦

7 グレンデル

8 盛夏

339

343

403

459

装帧 山影麻奈

レッドサン
ブラック
クロス
I

レッドサンブラッククロス1

合衆国侵攻作戦

REDSUN BLACKCROSS vol.1

War Plan : Operation 〈Gold〉

by

Daisuke SATO

2001

プロローグ

第四次世界大戦・昭和六五年（一九九〇年）六月六日

「我等は増上慢極まりない民族なのだ。何か不愉快なことがあればたちまちひねくれてしまう。

だからこそ、諸外国から重んじられる政府の登場をひどく望んでいる。

そして、それを実現させるためならば、大きな犠牲を――

莫大な出費を払うのも悪くはないと考えている」

――オットー・フォン・ビスマルク（ドイツ第二帝国宰相）

ふつと早朝へと移り変わるにつれ、闇に沈んでいた情景が誰の目にも鮮やかな色彩を帯びるようになっていった。大陸的な風景という他なかった。

周囲の地形は嫌になるほど平坦だった。富山県の山間部で少年時代を過ごした日本陸軍戦車兵大尉・平野茂がこの土地を好かない理由としては、それで充分だった。広所恐怖症というほどではないが、とにかく、彼にとっては馴染みを覚えにくい土地であることに違いはなかった。

「参ったな」

平野は細く、尖った顔立ちに配された吊上がり気味の目に乾いた光を浮かべてそう呟いた。

「狙ってくれと言ってる様なもんだ」

それまで構えていた双眼鏡を降ろし、糸のように細い目をさらにほそめる。彼独特の、不快を示す表情だ。

平野の上半身は、車体のほとんど全部を土中に隠した四八式中戦車改二型の角錐形に近い砲塔、その上面にある車長用ハッチから外に出ていた。CBR——対化学・生物・反応兵器戦闘用防護服で着膨れている。全面的なCBR戦警報は出されていないので、フェイス・ガードと一体化されたマスクは着けていない。

戦車と溶け合った様に見える彼の姿は、鋼鉄のケンタウロスであるかの様だった。いや、異星人と言った方が良いかもしれない。

平野の下半身——砲塔からは、車体前面方向、ちょうど国境線の方角に向けて一二七ミリ滑腔砲の

長い砲身が突き出されていた。もともと、戦車の上には目視・赤外線欺瞞用のカモフラージュ・ネットがかけられているため、外部からその物体が戦車であるとは識別し難いようになっていた。

周囲には、戦術原則を知らぬ者にはその意味を理解出来ない間隔を開けて同じ様なシルエットが点在していた。平野の率いるコンバット・チーム——日本陸軍近衛戦車第1師団機甲第1旅団第2大隊第1中隊に所属する装甲戦闘車両群だ。彼の中隊は諸兵科連合こそ最良の戦力倍増要素という原則に従って、旅団から機動歩兵小隊と重迫撃砲分隊の増援を受けていた。古い呼び方で言うなら増強中隊だが、実際はとりたてて述べるほどの事ではない。先進国の軍隊であればどこでも、半世紀ほど前から行なっている平均的な部隊運用法だ。

事実上の「国境」を挟んだ東側には、地平線の向こうまで続く整備の良い舗装道路があった。一直線に延びてはいない。小高い丘や小さな森といった情景の中を、カーヴを描いてはしっている。本当の平原と言って良い平野の居る西側とは大違いだった。

それもその筈、この光景は半ば人工的に造られたものなのだった。

一九五二年以来、トート機関がその総力を上げて造りあげた国境防御地帯、カエサル・ライン。彼らは、純軍事的な必要性を最上位において大規模な土木工事を行ない、本来は起伏の目立たぬ地形が多かった北米大陸東西分割線——国境線付近東側のかんりの部分を丘と森の多い場所へと造りかえてしまった。

その理由は、至極わかりやすい。分割線の西側へ侵攻を実施する際、遠距離から阻止攻撃を受けぬため。そして、西側から攻撃を受けた場合、第一線の防御陣地として使用するため。ドイツ的な軍事思想から言って、前者の方に重きが置かれている事は言うまでもないが、やはりドイツ的な発想に従い、後者として使用する場合の準備もおさおさない。

人工的な地形の中には、無数の永久陣地設備が設けられている、平野たちはそう教えられていた。戦術原則から言えば（余程兵力上の優位に立っていない限り）、見晴らしの良い平原での戦闘は悪夢に等しいものであるからだ。ナポレオン戦争を契機として始まった防衛側優位の一般則は、二〇世紀末と言つて良い一九九〇年——昭和六五年になつてもその正統性を失っていない。

トート機関が三〇年以上も努力を傾けて建造した人工地形は、その点における優位を獲得するためのものだ。^{クロステン・グルトバウ}十字条旗——かつて、州の数だけ描かれていた星の替わりにハーケン・クロイツを描いた国旗を翻す東側の「アメリカ」は、そういう国になつてゐるのだつた。

無論、その立場は、欧州そしてアラブの幾つかの国と同様、ドイツ第三帝国の完全な属国だ。G E T T O——大欧州統合条約機構などという名称は、その実態を糊塗^{こと}するための欺瞞に過ぎない。

平野が周囲の眺めを嫌っている理由には、そうした背景もあつた。

東側に対して、彼の祖国が支援する昔ながらのアメリカ——合衆国は国境線の防備にそれほど予算を投入していない。かつての合衆国は国防のために市民生活を犠牲にすることに反対の大きい国だったが、日本政府が支持している合衆国、いわゆる西アメリカは、その伝統を濃く受け継いでいる。

長大な東西分割線の一部の防衛を受け持つ平野の増強中隊が、東側に比べて明らかに不利な地形に展開していた理由はそれだつた。どれほどカムフラージュに気をつかつて、平らな地形では敵の狙い撃ちからいつまでも逃れている事は出来ない。

西アメリカ防衛の指揮を担当するH Q / C O N U S T O / P A C T O——太平洋条約機構合衆国作戦域司令部は、有事の際、おそらく一〇〇キロ単位の後退戦を実施したあとでなければ、本格的な反撃は行なえないだろう、と非公式に認めていた。

それならば分割線沿いに二〇個師団近い日・米・英（英連邦）地上部隊を配備している理由は何な

のだ、という事になるが、そこには現実政治の強烈な要求がある。

要するに、H Q／CONUSTOが「見捨てゐる」予定の地域に居住する合衆国市民に、不安を覚えさせないための政治的部隊配置なのだった。現実にはそれがほとんど不可能であるにもかかわらず、公式の席でH Q／CONUSTO歴代司令官は、ドイツ帝国軍——すなわち東アメリカ配備の大欧州統合条約機構軍が攻勢を開始した場合、分割線付近で徹底的な防戦を試みると言明し続けていた。

一九四三年に終結した第二次世界大戦以来、半世紀近くもの間国家社会主義と戦い続けている「自由世界」は、たとえ軍事的には正しくとも、市民を見捨てゐる戦略を（公式に）採用する訳にはいかないからであつた。

ただでさえ、いまや、彼らの手に残された地球上の地域は、敵に対してひどく少ないものとなつてゐる。日本列島を始めとする太平洋諸地域、北米大陸西岸、そしてインド亜大陸と中東の一部——それだけが、彼らの縄張りだつた。ドイツ帝国は経済的破断界まで来ているという観測も一部では囁かれてはいたが、それが事実かどうか、誰にも（当のドイツ人たちにも）良くわからなかつた。

北陸の豪雪地帯に生まれた平野茂大尉を合衆国戦域——正確には、ミシシッピー州ヴィクスバークのミシシッピー河東岸へ飛び地の様に突き出した「西側」領域へ送り込み、不快感を抱かせていた現実とはそうしたものだつた。

一般に突出部と呼ばれてゐるこの地帯は、天然の要害であるミシシッピー河の防御効果を受けられないこともあいまつて、合衆国戦域の中で最も危険な地帯であると判断されていた。そうであるからこそ、太平洋条約機構軍最強をうたわれる重機甲部隊、日本陸軍近衛戦車第1師団が防衛を担当していたのだつた。守りきれれると思つてゐる者は誰一人として存在しなかつたけれども。

戦車兵用ヘルメットに組み込まれたスピーカーが乾いたノイズを響かせた。

平野は薄い唇を噛み締めた。現在、合衆国戦域の全部隊は完全な電波管制を敷いているから、もし何か通信があれば、その内容は二つしかない。戦闘態勢を解いて基地へ帰還するか、戦闘開始命令かの何れかだ。

平野はその内容が前者である様、祈った。

悪化の一途を辿っている対独関係が開戦の瀬戸際まで来ているのは彼も知っていたが、何か奇跡が起きて、情勢が改善されないかと願っていた。大尉の階級章を着けているとはいえ、平野はまだ二〇歳を過ぎてからそれほど年月を経ているのではない若者だった。大学での単位稼ぎに、選択科目の陸軍短期現役将校課程——予備役将校課程を受講したおかげで、最初から中尉に任じられた二年間限りの現役将校に過ぎなかった。

日本の陸軍、海軍、統合航空軍は、戦時に必要となる莫大な後方勤務要員を平時からプールしておくため、平野の様な若者を中尉として採用し、大尉として予備役に編入するシステムを採用している。このシステム——課程を受講した学生に大学が与える成績は常に優だった。年に一個の割で与えられるから、計四個になる。第三次世界大戦の後に日本は（経済的要求に従って）徴兵制を廃止していたから、学生たちに軍とのかかわりを持たせる手段としては、なかなかうまくいかなかった。平野にしても、就職に有利な優の数と軍歴を得るために、短期現役将校を志願したのだった。そんな彼が、戦争を望んでいる訳がない。

だが、現実には彼の最も望まぬ方向へと動いた。

スピーカーからは、最悪の命令が響いていた。

「全部隊、全部隊、こちらサクラ。状況三七七。全面C B R戦態勢。一部地域において敵初弾はすでに弾道飛行下にあり。武運を祈る。終わり」

「畜生」

平野は拳を握り締め、戦車の上面装甲を叩いた。厚い手袋をはめていてさえ、かなりの痛みをおぼえた。両目の傾斜を普段よりさらにきつくしながら、ヘルメットのマイクに叫ぶ。

「クラマ〇六より全車、状況三七七。C B R戦態勢をとれ。全兵器、実包装填。^{E M C o N}電波管制は中隊系に限り解除。ただし、敵発見まで発信は禁止。なお、カムフラージュ・ネットはそのまま良い。終わり」

状況三七七とは、全面通常兵器戦闘を想定した通信符牒^{ラジオ・コード}の事だ。

ただし、敵の出方がはっきりしないから、一応、全ての兵器に対応可能な態勢を整えておかねばならない。

言い終わるが早いか、彼はヘルメットを外し、マイクとスピーカーの仕込まれたマスクと一体化されているフェイス・ガードをゴムバンドで装着した。その外見は、顔面部がグラスファイバー製であることを除けば、頭をすっぽり覆うゴム製マスクに近い。

平野は首の周囲を完全に外気から遮断する様になっているフェイス・ガード下部の不燃ゴム製スカートにつけられた紐^{ひも}を引っ張り、きつく締めた。

もどかしげな手つきでヘルメット・マイク用のプラグを外し、フェイス・ガードのそれを替わりに差し込み、続いて送気パイプを車内の送気口と接続する。空気の流入を確認するとさらに忙しげな手つきで再びヘルメットを被る。砲塔後部から自動装填装置が一二七ミリ翼安定徹甲弾の弾体と装薬を砲に押しこむ固い音が生じた。

その直後、彼の増強中隊に敵が向けた重砲の砲声が轟いた。

「全車、対砲撃防御！」

平野は厳しい声で叫び、上半身を車内へと落とす様に隠した。同じ動作の中で、ハッチをつかみ、力まかせに閉じる。両手で内側にあるレバーを回し、ロックした。

弾着の轟音が響いた。意外に近いらしく、四八式の六〇トン近い車体が揺れるのが感じられる。続く轟音がないところからして、本格的な砲撃ではない。弾着点が有効かどうかを確かめるための試射だ。もちろん、フェイス・ガードで隠された平野の表情に安堵の色はない。

「すぐに効力射がくるぞ」彼は吐き捨てる様に言った。

適確な判断だった。

車体が揺れるほど近くに着弾したのだから、敵は直ちに全力で射撃を開始するだろう。それが果たして、古典的な長時間にわたる攻勢準備射撃なのか、それとも未だその効力を失っていない電撃戦を支援する比較的短時間の射撃なのか、今の平野にはわからなかった。機甲突破を前提とする電撃戦の支援であるのなら、砲撃の傘に守られる様にして敵部隊が出現する筈だった。

再び轟音が響いた。車体が揺れる。

予想どおり、今度の轟音と震動は連続していた。

平野の部隊を制圧するための効力射であった。彼は、着膨れているためかなり無理のある姿勢でハッチの周囲に設けられた外部視察口、ヴィジョン・ブロックから状況を確認した。

土煙、爆発、黒煙、轟音。車体に何かが当たる金属質の反響音。榴弾の破片が戦車の車体に当たり、弾かっている音だった。平野は背筋に冷たいものを覚える。

多少の動揺を感じながらも、彼は、おそらく敵軍が侵攻してくるであろう舗装路に意識を集中し続けた。砲撃開始から数分が過ぎた頃、鉄の嵐の向こうに、何かが見えた様な感触を覚える。

平野はヴィジョン・ブロックから離れると、車長用照準器のアイピースに昆虫の様な外観を呈して

いる頭を押し付けた。自分が何かを確認した辺りにそれを旋回させ、倍率を上げる。

欧州本土のアウトバーンよりさらに大規模に造られたコンクリート舗装の高速道路上に、長大な隊列の先陣が姿を現わしていた。

黄色を基調とした迷彩。角型の砲塔。威嚇的に突き出た長い砲身。比較的高めの車高。無線通信装置の充実を物語るアンテナ。そして、きつい傾斜を与えられた車体全面に描かれたバルカン・クロイツ。

初級教育以来、何度も叩き込まれたシルエットだった。間違いない、ドイツ帝国軍の主力戦闘戦車だ。四八式改二型がその主敵として想定し続けてきたドイツ帝国陸軍の最強戦車、X III号C型——ケーゲルV型だった。

「サクラ、サクラ、クラマ〇六」

平野は努めて言葉を惜しみながら大隊本部へ敵情を報告した。意識のどこかで彼は思っていた。

この報告を終えたら、中隊に射撃命令を出さなければならない。

射撃命令を出したら——俺にとつての第四次世界大戦の開幕だ。畜生め、なんでこんな所に俺はいるのだ。一体全体、どういう訳で戦争は始まったのか？ 誰にこの責任があるのだ。そして、この世界は、どうしてこうなってしまったんだ？ 生き残る事が出来たら、なんとしてもそのすべてを調べあげよう。そして世界をこんな場所に変えた奴等を一人残らずブン殴ってやる。絶対に！

もともと、それがかなり難しい注文である事は、平野自身が一番良く理解していた。



西半球

凡例

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| ■ 大ドイツ帝国(欧州連合) 領域 | ➡ ドイツによる政治工作重点地域 |
| □ 〃 寄り中立国 | ⇨ 日英による政治工作重点地域 |
| ■ フランス領ケベック
(1945年併合、欧州連合領域) | ➡ 日本側通商路 |
| ▨ 日本帝国(日英同盟) 領域 | ➡ ドイツ側通商路 |
| ▤ 〃 寄り中立国 | --- ウラル戦線 |
| | ✕ 内戦 (※1 中華人民共和国、中華民国) |
| | (※2 ベトナム内戦) |

第三次世界大戰、開戰直前：戰略的概観

1947年1月現在

Just before The World War III, Strategical Situation : Jan.1947 present



1

戦争計画..
一九四七年

「我々の支配者達は、ヒトラーが危険な男である事も知らずに

ナチスの政權奪取からポーランド侵攻までの日々を送ってきた様な者達なのである。
そんな愚かしい連中が、我々の世代、その頭上にぶら下がっている」

——ジョージ・オーウェル

1 帝都

テゲル空港、ベルリン、大ドイツ帝国

一九四七年二月二〇日

その日の夕方近くになってテゲル空港に着陸したユンカース社製の軍用輸送機は、機首と両翼に備えた合計三基のユモ211Eエンジンのうち、両翼の二基を停止した。両翼下に追加装備されたジェット・エンジンはその前に止められていた。そのJu252D輸送機の機首にはトランスポート・ゲシュヴェーダー127——第127輸送航空団のエンブレム（ライフルを咥えたコウノトリ）が描かれており、その機体がオストラントよりさらに東から飛んで来た事を示していた。

なぜかと言えば、部隊ナンバーの126→150は第6航空艦隊^{ルフトワッフェ}に与えられているからであり、その航空艦隊の担任作戦域は未だに散発的な戦闘が展開されている独露国境、ウラル戦線であるからだ。

当然、所属はドイツ空軍である。胴体後部の白フチ付きバルカン・クロイツ、垂直尾翼のフチ無しハーケン・クロイツがそれを主張している。

もちろん、こうした面倒な見方をしなくとも、その機

体が東から長距離飛行をしてきた事は誰にでも理解出来た。両翼下のパイロンに落下燃料増槽^{タンク}を一個ずつぶら下げていたし、機体は、ウラル戦線（旧東部戦線）配備機特有の白色迷彩で塗装されていたからだ。その色合いは飛行環境の厳しさの影響を受け、いささかすんだ、鮮やかさに欠けたものだ。

Ju252Dの外見はそうしたものであったから、その機体がテゲル空港北辺の軍用駐機スポットで停止しても、取り立てて注意を払う者はいなかった。国際線空港であると同時に旧ソヴィエト・ロシア地域軍用輸送航空路の西欧との結節点であるテゲルには、毎日数十機の軍用輸送機が飛来し、何処へかと飛び去っていくからだ。

駐機スポットに入った機体の周りに、何名もの空軍整備兵が集まった。陸軍のRHナンバーを付けたベンツで乗り付ける将校もいた。

整備兵たちは忙しげに動きまわり、両翼下の主脚に車輪止めをあてた。それを確認した下士官は、コクピットのパイロットに向けて合図を送った。

パイロットが肯いた。

同時に、機体後部から何かへ圧力をかける騒音が生じ、

その下面が口を開け、垂れ下がってゆく。それまで機体下面の一部を構成していたその部分は、駐機スポットのコンクリート面に触れても圧力がかけ続けられ、やがて尾輪が地上を離れた。圧力音が響いてから数分が過ぎた時、機体は地上と水平の姿勢をとっており、圧力装置によって地上に押し付けられた機体下面の一部は、兵員乗降用の傾斜路^{ラッセンブ}になっていた。

傾斜路から、規律厳正で知られるドイツ兵士にしてはいささかだらけた様子の一団が降り始めた。車で乗り付けてきた将校も、それをたしなめようとはしなかった。彼らは、ウラル戦線から休暇で——あるいはめでたく満期除隊して——本国へ帰還した幸運な男たちであり、そうした人々を細々とした軍律でしる様な真似は、いかなドイツ軍人とはいえ、容認できるものではなかった。帰還兵たちは、軍用管制塔の脇で自分たちを待っているであろう家族や恋人に向け、彼らにしかわからぬ浮き立つような思いを抱いて歩み去った。機体のそばに残ったのは、整備兵を除けば、軍用ベンツで乗り付けた将校だけだった。

にぎやかな一団が去った後、奇麗に磨きあげられたブーツを光らせて、傾斜路に牛革靴を下げた陸軍将校が現

われた。階級は大佐。公式には使用を禁じられている一九三四年式野戦帽をあみだに被り、上下は黒デニムの戦車兵ユニフォームを身に着け、その上から私物らしい革コートをまとっていた。

それだけでも歴戦の将校だという事がわかるが、彼の見掛けにさらなる重みを加えていたのは、上衣——パンツァー・ジャケットの下に着込んだ灰色のシャツの襟元に、黒ネクタイの替わりに止められていた相葉^{かば}付騎士十字章の鈍い輝きだった。

どうやら、帰還兵達の気分を壊さぬ様、あえて最後に出てきたらしい。

彼の姿を見て、軍用ベンツで乗り付けてきた将校はそう思った。彼——大ドイツ帝国陸軍参謀本部の作戦参謀、ラインハルト・ゲーレン大佐は、現代のプロイセン騎士といった印象を与える傾斜路の大佐に愛称で声をかけた。彼とは一九四三年の対ソ戦末期、モスクワの南方で共に戦った事があった。

「ヘーリ！ こっちだ」

「久しぶりだな、ハーティ」傾斜路から飛行場に降り立った騎兵大佐ヘルマン・フォン・オッペルン・ブロウニコスキーは、いかにも貴族的な、ある種の鳥類を思わせ

る顔立ちに控え目な笑みを浮かべて答えた。

騎士の様に見えるのも無理は無かった。ブラウニコスキは完璧なプロイセン軍人貴族の家に生まれた男だったし、一九三六年のベルリン・オリンピックでは屋外馬術障害で金メダルを得た事すらある男だった。

ブラウニコスキは言った。

「大佐参謀じきじきの出迎えとは光栄だ」

「まあ、急ぎの仕事だからな」ゲーレンは、ブラウニコスキに劣らぬ貴族的な顔立ちに複雑な微笑を浮かべて言った。彼が一人で出迎えに來たのは、機密保持のためもあった。「乗ってくれ。ベントラー通りでマンシユタイン上級大将がお待ちなのだ」

その名を聞いてブラウニコスキは片方の眉だけを上げた。ベルリンのベントラー通りには秘匿名称マインバッハ2——ドイツ陸軍総司令部が置かれている。

ゲーレンの運転するベンツがアウトバーンに入った後、それまできついロシア煙草を吹かしているだけだったブラウニコスキは訊ねた。

「で、前線から装甲連隊指揮官を呼び戻す理由は何なのだ？ ゲリラ相手とはいえ、楽な戦いをしている訳ではない」

ゲーレンは前方を見つめたまま言った。「ダッシュボードの中を見てください。書類が入っている。マンシユタイン御大から君へ見せる様に言われた」

ブラウニコスキはダッシュボードから封筒を取り出し、その中に収められていた書類を広げた。入っていた書類は一枚だけだった。そして、その帝国軍公式用紙には〈ゲルベII〉と〈ゲルド〉^{ゴールド}という二つの言葉だけが記されていた。

ブラウニコスキは下手な冗談でも聞いた様な顔と声で言った。

「これは、私が知っているそれと同じ意味だと解釈して良いのだろうか？」

「同じ意味だと解釈して良いのだ」左折のウィンカーを出しながらゲーレンは答えた。

彼の視線の先には、完成時にはベルリン中心部の南北を幅一二〇メートル、延長三キロ以上も縦貫する予定のゲルマニア通りの建設現場と、その両端に建築中の醜悪な巨大石造建築群——南端の高さが一二二メートル近くにもなる第二次世界大戦記念凱旋門、北端の高さ二五〇メートル、直径二四三メートルの帝国大聖堂が見えた。

いずれも、ヒトラー自身のスケッチを基にした設計で、

ヒトラー好みの新バロック様式の外観を持ち、一〇年以内に完成する予定だった。

総統はかつてのお気に入り建築家アルベルト・シュペーアを建築関係の職務から外し、そのゲネラル・ペバウUNKス・プラン、総合建築計画と呼ばれていたペルリン改造案をヴィルヘルム・クライスに修正させていた。シュペーアより自分の方に建築デザインのセンスがあるとうかつたからだ。現在では、オーベル・ペバウUNKス・プロイエクト——最高建築計画、あるいは、完成後に北駅と南駅に挟まれたその地区へ付けられる名前にちなんでゲルマニア・プロイエクトと呼ばれていた。

こうした大規模都市改造工事が行なわれているのは何もベルリンだけではなく。リンツ、ミュンヘン、ハンブルク、ニュルンベルクの四都市が、ベルリンと共に〈総統都市〉の指定を受け、古き街並みを失いつつある筈だった。

都市改造にはそれぞれ特色があった。たとえばニュルンベルクは党大会用の集会都市に、ヒトラーの故郷と言つて良いリンツに至っては、将来の帝国中枢たるべく全市街が造りかえられて、〈アーリアポリス〉の名の下に、全世界を睥睨する事になっていた。いずれも、かつての

ローマ帝国を髣髴とさせる巨大石造建築から成り立つ、ヒトラー個人の祝祭空間だと言えた。建築に必要な大量の花崗岩をノルウェー等から輸送する船、輸送船の建造のため、専用の造船所まで造られた程だ。

当初、ヒトラーはこれらの都市改造を一九五〇年までに終えるよう命じていたが、総額で二〇〇億ライヒスマルクにも達する費用がそれを邪魔して、完成予定は五五年まで繰り延べされていた。

ブロウニコスキーは友人の視線が捉えたものを眺め、言つた。

「私は、人間の正気と狂気というものについてつねづね疑問を抱いているのだ」

「それは、私も同様に」ゲーレンは答えた。強迫観念に近いコミュニケーションへの憎悪を抱いている点を除けば、彼もまた、ドイツのパワー・エリートとしての良識を充分に持ち合わせている男だった。「だが、総統大本営でも誰もがそのつもりだ」

「本気なのだな」ブロウニコスキーが言つた。

「本気なのだ」ゲーレンは乾いた声で答えた。

「二日前、総統は〈イエローII〉と〈ゴールド〉の準備

開始を決定した。帝國軍總司令部が「イエローII」を担当し、「ゴールド」は陸軍總司令部が担当する事になった」

ブロウニコスキーは訊ねた。「家族に会う時間はとれるのだろうか」

「ヘーリ、君はOKH附になる。家は手配済みだ。君の御家族と一緒に住むだけの広さは充分にある」と、ゲレンは答えた。

ゲレンは胸ポケットから銀製のシガレット・ケースを取り出すと、今ではドイツの特権階級しか吸えなくなつたネイヴィー・カットを啜えた。道路に視線を向けたままライターで火を付ける。ゆっくりと紫煙を吐き出した。

アウトバーンから外れたため、道路の両側には「帝國規格」の労働者用住宅が増えていた。一階はフォルクスワーゲンの収まる車庫、二階は住居という家だ。歩道には一般市民に加え、二列縦隊で歩くヒトラー・ユーゲントの少年たちが見えた。何か唄っている。最近リヴァイヴァルしている「聖英進軍歌」だった。

とつくに英本土は陥落したというのに、御苦勞な事だ、ゲレンはそう思った。

彼は一九四〇年一〇月、ロンドンへ最初に突入した装甲師団の作戦参謀だった。

独裁国家らしい拔擢人事で、ヴァルター・ヴェーファール空軍参謀総長の大抜擢によって対英航空作戦指揮の全権を委ねられたヴェルナー・メルダース大佐が、最初の攻撃で英仏海峡付近の英空軍基地とレーダー・サイトを撃破、その後戦略爆撃で英軍の継戦能力を崩壊させたことにより、英本土侵攻作戦「ゼーレーヴェ」が発動された。決死の反撃を行なう英海軍によって独軍は海峡で一個師団を沈められたが、制空権を持たない艦隊にとれる行動は限られ過ぎていた。

一九四〇年九月一〇日、独軍第一波四個師団が海峡ぞいの英本土に上陸し、ダンケルク撤退でほとんどすべての重装備を失っていた英本土軍は壊滅した。

ゲレン個人に関して言えば、絶望的な抵抗を試みる英軍部隊がたてこもつたロンドン塔を砲撃で破壊する命令を出したため、カナダに逃亡したチャーチル政権は彼に文化財保護条例違反の逮捕状を出しているという噂だった。

「そういう事か」プロウニコスキーが諦めた様に言った。「以前、予備研究に参加した時、まさか本当になりはしまい、と思っていたのだが」

「私もそう思っていた」ゲーレンは答えた。「だが、本当になった。決行は明年春の予定だ。我々は、合衆国と日本に第三次世界大戦を仕掛けるのだ」

2 富士機甲学校

須走、静岡、日本

三月一日

日本陸軍は富士東方に広大な演習場を保有していた。それに隣接して多くの教育・研究施設も設けられている。その中でも特に大規模なものは、一九四〇年代初頭、それまで東京、千葉、兵庫等に分散して設けられていた戦車関係の教育・研究施設を移転・統合して開設された陸軍機甲学校（通称富士学校）だった。

名前からもわかるとおり、戦車についてだけの教育・研究を行なう機関ではない。富士学校は戦車、機動歩兵、機動砲兵を始めとする装甲兵力全体についての教育・研究を行なうナショナル・センターだった。

その日、学校に最も近い機甲試験場では、陸軍が試作

型を完成させたばかりの次期主力戦車、CR3試作中戦車の機動試験が行なわれていた。制式採用が決定されたならば、七式中戦車という名で生産が開始される筈の車両だ。

低音が響き、鼓膜よりも脊髄を震動させる種類の轟きが迫ってきた。右手に見える小高い丘の向こう側から、黒っぽい排気ガスがたちのぼる。

空は晴れ、昼下がりの太陽はかなり高い位置にあったが、三月の富士山麓はまだ充分に寒かった。試験場の地面は昼の暖気と夜の寒気が果てしの無い闘争を繰り返した結果としてひどくぬかるんでいたが、そうであるからこそ、機動試験には最適の環境だった。ぬかるみの中ですら、その戦車が持つ本当の機動力を評価する事が出来る。

様々な計測器に取り付いた技術将校や技術者から少し離れた位置に立っていた西竹一騎兵大佐は、丸みのある顔に軽い笑みを浮かべ、近づいてくる履帯の硬質音とガソリン・エンジンの轟音を楽しんでいた。

彼は騎兵の出身であり、様々な理由から馬というものをごよなく愛していたけれども、けっして戦車を嫌って

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。